

身延文庫蔵「大乘義章第八抄」所収「四有義・四識住義・四食義・五陰義」翻刻

田 戸 大 智

Republication of *Bhava-catuṣṭaya* 四有義, *Catasro Vijñāna-sthitayaḥ* 四識住義, *Catvāra Āhāhārāḥ* 四食義, and *Pañca-skandha* 五蘊義 in *Eight Chapters on The Daijyo Gisyō Syō* 大乘義章抄 (a commentary on *The Dacheng Yizhang* 大乘義章) owned by Minobu Bunko
Tado Taichi

The Daijyo Gisyō Syō with 13 chapters owned by Minobu Bunko is used as material for debates on *The Dacheng Yizhang*, which is said to be created by Jingyingsi Huiyuan 淨影寺慧遠 (523–592). Kanjin 寬信 (1084–1153), who was familiar with not only the Shingon Esoteric Buddhism but also the Exoteric Buddhism and the Sanron School in particular, summarized debates on *The Dacheng Yizhang*, which was learned and used in various Buddhist memorial services performed in Todaiji Temple, Daigoji Temple, and other temples, in the form of *The Daijyo Gisyō Syō*. According to *The Daijyo Gisyō Syō*, academic studies in the Insei Period are known to involve not only *Mahāyāna* 大乘 but also *Abhidharma* 阿毘達磨 from a broad perspective. Because many materials, which were scattered and lost, are quoted in *The Daijyo Gisyō Syō*, reading, understanding, and analyzing it are presumed to be extremely important tasks.

Regarding the republishing of *The Daijyo Gisyō Syō*, we have already republished *The Meaning of the Two Kinds of Lives and Deaths* (二種生死義) in *Eight Chapters on The Daijyo Gisyō Syō*, and *The Meaning of One Vehicle* (一乘義) in *Nine Chapters on The Daijyo Gisyō Syō*. In particular, *The Meaning of One Vehicle* is quoted in *The Enichi-Kokoshō* 恵日古光鈔 with 10 chapters, which is owned by the Todaiji Temple Library and a part of which was recorded in writing by Shonen 聖然 (?–1312) in Todaiji Temple. Therefore, we can specifically prove that *The Daijyo Gisyō Syō* had been accepted by Todaiji Temple.

This paper presents the partial republication of four (*Bhava-catuṣṭaya*, *Catasro Vijñāna-sthitayaḥ*, *Catvāra Āhāhārāḥ*, and *Pañca-skandha*) out of nine items in *Eight Chapters on The Daijyo Gisyō Syō*. *The Daijyo Gisyō Syō* refers to not only materials on *Abhidharma*, such as *Abhidharma-kośa-bhāṣya* 阿毘達磨俱舍論, but also *Satyasiddhi-śāstra* 成実論. Controversial objects are extracted by comparing each item in *The Daijyo Gisyō Syō* with the corresponding item in *The Dacheng Yizhang*, and the extracted objects are discussed. Therefore, although *The Dacheng Yizhang* was the subject of discussion in *The Daijyo Gisyō Syō*, it is recognized that *The Daijyo Gisyō Syō* attached great importance to the reading of materials on *Abhidharma* and *Satyasiddhi-śāstra*, together with that of *The Dacheng Yizhang*.

身延文庫蔵「大乘義章第八抄」所収「四有義・四識住義・四食義・五陰義」翻刻

田戸大智

一 解題

身延文庫蔵「大乘義章抄」十三帖は、淨影寺慧遠（五二三～五九二）撰とされる『大乘義章』を主題とした論義資料であり、勸修寺流の祖とされ、密教だけでなく顯教、特に三論にも精通した寛信（一〇八四～一一五三）が東大寺や勸修寺、醍醐寺等で行われた諸法会で修学された『大乘義章』に関する論義を集成したものである。同書によれば、院政期の学究が広汎な視座のもとで大乘だけでなく阿毘達磨にも及んでいたことが窺知され、またそれに関連して現在散佚して伝来していない經疏類も多数参照されていることから、その読解と更なる内容分析がより必要な作業となることが想定されよう。^①

そこで、本稿では、同書十三帖の一つである「大乘義章第八抄」に収録される九義科の中、「四有義・四識住義・四食義・五陰義」の四義科の部分翻刻を提示することにした。同書の翻刻については、同じく「大乘義章第八抄」所収の「二種生死義」と「大乘義章第九末」所収の「一乘義」を既に試みてみた。^②中でも、「一乘義」は、東大寺新禪院の聖然（？～一三二二）の一

部筆録による、三論宗の論義を集成した東大寺図書館蔵『恵日古光鈔』十帖にその一部が引用されていることから、「大乘義章抄」が東大寺で受容されていた実態を具体的に論証することができた。

さらに、東密教学、特に新義教学を主導した頼瑜（一二二六～一三〇四）が師事した真空（一二〇四～一二六八）に着目し、真空が出仕した三講の一である「法勝寺御八講」でも『大乘義章』が南都北嶺の学僧により積極的に修学されていたことが明らかとなった。^③そして、こうした公請が必要な格式高い法会での諸議論を検証すると、それらが「大乘義章抄」に所収される論義を基盤としていることが明白に認められるのであり、同様のことが他の法会、例えば興福寺維摩会や宮中最勝講等にも当てはまる可能性が高い。したがって、同書を基本文献として定置し継続的に翻刻を行う意義は極めて大きいと考えられるのである。

本稿で取り上げる「四有義・四識住義・四食義・五陰義」では、『俱舍論』『阿毘曇毘婆沙論』『雜阿毘曇心論』等の阿毘達磨文献のみならず、関連する『成実論』も参酌され、『大乘義章』の各義科との内容対比から問題点を抽出し議論が展開されている。院政期に南都で俱舍学や因明学等が盛んに研学さ

れていたことは既に指摘されているが、注目すべきは「五陰義」の第三問に「康治二年（一一四三）最勝講 証禪闍梨 三井」、「第五問」に「天養元年（一二四四）東大寺三十講 覚光」という註記が付され、実際に諸法会で実修されていたことが看取できる点である。特に、「五陰義」の第三問は、正倉院聖語藏『義章問答』巻四に所収される第三問と同一であり、人口に膾炙された論題であったことが推考される。学僧にとっては、あくまでも『大乘義章』が論義の対象であったとはいえ、付随する阿毘達磨文献や『成実論』等との併読も重要であったことは贅言を要しない。その比較を含めた検討は、後日を期したい。

二 凡 例

- 一、本稿は、身延文庫藏「大乘義章抄」十三帖の一である「大乘義章第八抄」に収録される九義科（二種生死義・四有義・四識住義・四食義・五陰義・六道義・八難義・十二入義・十八界義）の中、「四有義・四識住義・四食義・五陰義」の箇所を部分翻刻したものである。
- 二、本翻刻は、原則として新漢字を使用した。
- 三、底本には一部送りがなが付されているが、句読点のみ私に付した。
- 四、原文では、問答箇所が引用典拠箇所より一段下げになっているが、翻刻ではすべて行頭を統一した。
- 五、校訂者の解釈により、全体を問答ごとに分割し、冒頭に【】で問答番号を挿入した。
- 六、原文の異体字や略字、俗字等は基本的に現行の正字に改めた。

畧↓略など

七、以下の文字は本来別字であるが、慣用に合わせて置き換えた。

尺↓釈 廿↓二十

八、以下の仏教省文草体は、本来の形に還元した。

𑖀↓涅槃 井↓菩薩 井↓菩提 めめ↓婆娑 冗冗↓煩惱

九、脱字や誤記の註記は、原文どおり行間に記した。

十、中略の箇所は、原文と同じく○で示した。

十一、虫食いや判読不能の箇所は、□を用いて示した。

十二、装幀の糊付けにより判読不能の部分で、引用典籍の原文から補える箇所は（ ）を用いて記した。

十三、『大乘義章』や『雜阿毘曇心論』等からの引用文は、原文との校異を行って示した。

十四、書誌的概要は、次のとおりである。

〔書写年代〕 文和四年（二三五五）

〔書写者〕 寥海

〔外題〕 大乘義章八

〔内題〕 二種生死義

〔尾題〕 大乘義章第八抄

〔奥書〕

本云、天養元年（一二四四）十一月十九日始抄、同二十四日期畢之。始自保延二年（一二三六）、相当先妣四月二十四日遠忌、勤修三十講九箇年。于茲以義章兩卷、為其宛父、為小生等、遂歲抄集要文。而今年重病相纏、講筵遲怠、当于年迫愁以行之。非是宿病之愈、不闕当年之勤也。七八両卷馳筆抄之。老

病危免、心肝如春。生年六十一、後見哀憐矣。

天養元年（一一四四）十一月二十四日 權大僧都 寬信記

治承元年（一一七七）九月十日 隆円書之。二交了。

文和四年（一二三五）乙未十一月二十九日書之了。小比丘寥海^{三九}_{通七}

〔墨印〕身延文庫

粘葉裝、表紙（茶）、楮紙、一帖、全四九丁、縱二七・五糎、橫二〇・〇糎、

一頁二一行、一行約二〇字前後

三 目 次

四有義

【第一問】問。大乘心上善重惡、無有中有乎。

【第二問】問。色界中有形量、如何判之乎。

【第三問】問。欲天中有可有衣服乎。

【第四問】問。轉輪王中有有衣服乎。

【第五問】問。釈中有久近、有三說。且付七日・七七日兩義、其中不得生處。

如何釈之乎。

【第六問】問。解中有久遠有^{近歟}三師。爾者、章文用何義乎。

【第七問】問。欲界生有不具身根乎。

【第八問】問。付六根具不具義、且無色界可有色根乎。

【第九問】問。無學聖者、於四有具幾有乎。

四識住義

【第一問】問。成実心、不以識名識住、何釈乎。

【第二問】問。成実心、自地他地心相処名識住乎。

【第三問】問。成実心、処三世心可名識住乎。

四食義

【第一問】問。成実意、地獄有触食乎。

【第二問】問。成実心、滅定□有識食乎。

【第三問】問。成実心、色界天於四食有幾乎。

【第四問】問。成実心、可立中陰乎。

五陰義

【第一問】問。成実心、内外法共成人乎。

【第二問】問。毘曇心、三禪已還可有捨受報乎。

【第三問】問。毘曇心、証第三禪有意地樂、引何文乎。

【第四問】問。成実心、苦・樂・捨三受通三界。爾者、引何文乎。

【第五問】問。付受陰開合、成実心、立十八意近行。爾者、何分別十八差別

乎。

【第六問】問。成実心、苦受可通染淨乎。

【第七問】問。毘曇意、以變化心望所化事可云親起乎。

【第八問】問。成実心、五陰共通三性乎。

四 本 文

四有義

出阿含經・毗曇論

【第一問】

問。大乘心上善重惡、無有中有乎。私云、無_云。付之、中有在一念。設雖趣報速疾、何無中有乎。又上善者、何者乎。

章云、毗曇法中、定有中陰。成實法中、一向定無。有無偏定故成諍論。故涅槃云、我諸弟子、不解我意、唱言、如來宣說中陰。一向定有、一向定無。大乘所說、有無不定。上善重惡趣報速疾、則無中陰。如五逆等。余業則有。異於偏定故、無諍論_云。

【第二問】

問。色界中有形量、如何判之乎。進云、隨所向處、小於生陰_云。付之、雜心論、色界中陰量如本有_云。

俱舍·正理等、亦同此說、如何。

私云、上天中陰一定難云加色界。可略之。

章云、四明中陰形量大小。如論中說。生人中陰、如有知小兒。上天中陰、以漸轉大。如中陰、隨所向處、小於生陰。准人可知_云。

章上文云、四有之義、出阿含經。毘曇論中、具広分別_云。章諸門分別皆如雜心。

雜心論中云、量者、色界中陰量如本有。欲界菩薩中陰亦如本有。三十二相莊嚴、其身 ○ 欲界余衆生中陰身量、如有知小兒形_云。

俱舍論九云、欲中有量、雖如小兒年五六歲而根明利。菩薩中有如盛年時 ○ 色界中有円滿如本有_云。

正理論云

旧婆沙七十二云、問曰、中有形為大小。答曰、其形如五六歲小兒。○ 問曰、

菩薩中有其形大小。答曰、如前時有少年形等。亦以三十二相嚴身 ○ _云。

私云、不分別欲·色界。只云中有有五六歲人_云。

以此文可會章釈。故以有□之。

古婆沙文、不似章釈。不云上天轉大。何故引此文。何會經可考之。

【第三問】

問。欲天中有可有衣服乎。私云、諸天中陰一向有衣_云。付之、雜心·俱舍等皆無衣服_云。何相違乎。

【第四問】

問。轉輪王中有有衣服乎。私云、有_云。付之、違雜心等、如何。

章云、九明中陰衣服有無。諸天中陰一向有衣。人中不定。如近仏地菩薩轉輪聖王及白淨比丘尼、福德殊勝、又具慚愧中陰有衣。余者則無_云。

雜心論十云、問。中陰有衣。答。或裸形。色界中陰有衣。色界慚愧增故。如彼法身不裸形、生身亦爾。欲界菩薩及白淨比丘尼中陰有衣。余衆生無衣。無慚愧增故_云。

俱舍論九云、色界中有量円滿如本有。与衣俱生。慚愧增故。菩薩中有亦与衣俱。鮮白苾芻尼、由本願力故。彼於世世有自然衣、○ 所余欲界中有無衣。

由皆增長無慚愧故_云。

旧婆沙七十二云、問曰、中有生時、為有衣不。答曰、一切色界中有生時皆有衣。所以者何。色界是多慚愧界。○ 欲界衆生中有、多無衣而生。唯除菩薩

白淨比丘尼。復有說者、菩薩中有無衣。白淨比丘尼有衣_云。

【第五問】

問。積中有久近、有三說。且付七日・七七日兩義、其中不得生處。如何積之乎。進云、死而更有云。付之、於中有死生之義、道理不可爾。依之、雜心解此積云、其日限必和合云。此積叶道理、如何。

俱舍即死即生云。何非論義。

【第六問】

問。解中有久遠近歟有三師。爾者、章文用何義乎。私云、後說為善云。第三久

近不定之義也。付之、雜心雖有三說無判正不。況初師七日義、世友之說也。

中陰、經說又同之。後被見下所引婆沙說。覺天說也。久近不定者、法救說也。何因章文用此義乎。

又尋云、旧婆沙以非久近為正義。如俱舍。何不引用此義乎。

章云、中有長短、人說不同。有人宣說、極短一念、長極七日。如此說者、齊七日來、必得生處。若七日來、不得生處、前陰滅已更受中陰。有人復說、中陰極長壽七七日。七七日来、必得生處。若不得處、死而更生。復有人說、壽命不定。乃至父母未和合來、常在不滅。此諸說中、後說為善云。

雜心論十云、問。中陰幾時住。答。七日或七七、乃至彼和合。○ 七日者、有說、中陰七日住。身羸劣故。問。若和合者必爾。若彼父母異處者、是人命終當云何。答。當觀是衆生業轉不轉。若於母可轉於父不可轉者、彼父則從他女人令中陰會。於父緣可轉者亦如是。若二俱不可轉者、此人未死而彼先和合日七七者、有說、七七日住。乃至彼和合者、復有說、不定乃至未和合間常住云。

俱舍論九云、如是有為住幾時。大德說言、此無定限。生緣未合、中有恒存。

○ 如有能招轉輪王業、要至人壽八萬歲時、或過此時方頓与果、非於余位。

○ 尊者世友言、此極多七日。若生緣未合、便數死數生。有余師言、極七七日。毘婆沙說、此住少時。以中有中樂求生有故非久住。速往結生。其有生緣未即和合、若定此處此類應生、業力即令此緣和合。若非定託此和合緣、便即寄生余處余類云。

旧婆沙七十二云、百卷本問曰、住中有為經幾時。答曰、經於少時不久。所以

者何。彼於六入、求受身處。是故速令生有相續。○ 尊者奢摩達多說曰、中

有衆生、壽七七日。尊者和須密說曰、中有衆生、壽命七日。○ 尊者仏陀提婆說曰、有壽命不定云。

私云、其広略抄之。其義皆如雜心。俱舍七日之義、同雜心。

【第七問】

問。欲界生有不具身根乎。進云、唯有意根無身根云。付之、欲界成意根、必成身根故。俱舍論云、若成就苦根、彼定成就七云。雜心同之。成苦根、必成身・意二根、如何。

章云、次就六根明具不具。生有之中、唯有意根所緣之色。未成已体故、無身根。以無身故、亦無眼耳鼻舌等根云。

俱舍論九云、為由業力精血大種即成根依。為業別生根依大種依精血住。有言、精血即成根依云。

【第八問】

問。付六根具不具義、且無色界可有小乘意色根乎。進云、無之云。付之、阿含經、無色界衆、見身子涅槃、淚下如雨云。如何。

章云、○無色衆生、大小不同。小乘說、彼唯有意根。^⑧大乘說、彼猶有形色。与色界同_云。

私云、阿含經別意也。此依毗曇性相也。

【第九問】

問。無學聖者、於四有具幾有乎。進云、具三有。無生有_云。付之、不可具中有、如何。

章云、次就凡聖分別四有。凡聖雖異、齊具四有。凡夫可知。聖人之中、學具四有、無學唯三。略無生有。無學聖人。更不生故_云。

私云、中般涅槃聖者也。

四識住義

【第一問】

問。成實心、不以識名識住、何釈乎。

章云、問曰、何故、唯說色・受・想・行等陰以為識住、不還識^⑨以為識住。○

若依成實、識時少識故、不說識以為識住。云何少識。六識之中唯有意識。通具統念。自余五識局在一念。不通相統。不如六惣^想・六受・六行並通統念。故曰少識。少故不論_云。

尋云、少識者、通六識積歟、將限意識歟。

私云、限意識也。□五識為一念無識住。此義、意識独雖有其名、不互六識名少識也。

又尋云、言意識統念、如何。成實心、意識相統不起二念。必一念之後、起想

受住。何云統念。

答。想受住之後、不受余心。後起意識云統念也。

重疑云、若爾、五識豈不爾哉。答。不起歟。五識只一念、無思量性後、起意識了別前境也。具四心事、雖異毗曇四心、是一具也。五識・意識相統之義、是同者也。

成實論五云、_{非相應品}汝言識処者、此經中說識所緣処、不說依処。何以知之。

即此經中說識緣色喜潤故住。汝雖言若識緣識住、則応有五識処、是事不然。所以者何。是識時少。識識事已、心生想等、是中起愛。起愛因緣、說名識処。是故、不說識是識処_云。

【第二問】

問。成實心、自地他地心相処名識住乎。進云、爾也。付之、不可有此義。又無文証、如何。

章云、若依毘曇、要当地法望当地識說為識住。異地則非。龜細別故。若如是者、依下地身起上心時、下地之身、応非識住。論自釈言、住相成就、猶名識住。若依成實、莫問自地及与他地。但有緣著。斯名識住_云。

論文如上抄之。

【第三問】

問。成實心、処三世心可名識住乎。_{疑如前。}

章云、次就三世分別住義。若依毘曇、於三世中同時相依、斯名識住。異時則非。若依成實、於三世中莫問同時及与異時。但令緣著、皆是識住。不簡前後_云。

章上文云、若依成実、心起前後。不說同時相依而住。但說心識緣余四陰。緣而愛著故名識住^云。

四食義

【第一問】

問。成実意、地獄有觸食乎。私云、無^云。

付之、彼論心、以冷煖等觸名觸食^云。何無乎。

章云、地獄之中、論積不同。若依成実、但有識食。毘曇法中、具有四食。彼說、地獄吞熱鉄等、能壞飢渴、即為段食。余三、心法常有。可知^云。

章上文云、^{弁相門}若依成実、羹飯等事名為段食、冷煖等名為觸食、或有衆生、

以思活命名為思食。○ 当応以彼現在思想而活命者、說為思食。如思玄妙得不死等。有漏識心、命報不壞名為識食^云。

成実論二云、^{四諦品}又有四食。搗食者、若麤若細、飯等名麤、酥油香氣及諸

飲等、是名為細。觸食者、冷煖風等。意思食者、或有人以思願活命。識食者、中陰・地獄・無色衆生。入滅定者、雖無現識、識得在故亦名識食^云。

重尋云、

黑白四業義云、成実論宣說、地獄之中、初出炎火、創得寒冷^①觸人之樂、并猪^②犬等食糞之樂、如是一切皆是善果^云。

【第二問】

問。成実心、滅定□有識食乎。

付之、滅定滅心、何有識食乎。依之、毘曇段食余勢^云。況彼論意、滅定無

為也、識食是有漏也、何。

章云、人中不定。若有心者、皆具四食。滅心之者、論說不同。若依毘曇、段食余勢令身不壞、更無余食。故彼宗中入滅定者、遠至七日即須出定。若過七日、段食勢盡、起則身壞。成実法中、滅心之者、現雖無心、識得在故、猶名識食。以識食故、入滅定者、雖逕多時、身亦不壞^云。

滅尽定義云、

【第三問】

問。成実心、色界天於四食有幾乎。進云、有識食^云。付之、除段食可有余三食。於有色處、何無觸・思二食乎。依之、本論出唯識食處地獄・中陰・無色滅定^云。除色界、如何。

章云、欲界諸天、与人相似。色界諸天、若依成実、唯有識食。毘曇法中、彼有心者、唯無段食有余三種。若滅心者、四食俱無。無色界天、与色界中有心者同^云。

私云、已上三論義答、見本論之文。^{如上抄之。}

【第四問】

問。成実心、可立中陰乎。進云、一切中陰唯有識食^云。付之、成実心、凡不立中陰。傍章所所積分明也、如何。

章云、次弁中陰。成実法中、一切中陰唯有識食^云。

四有義云、毘曇法中、定有中陰。成実法中、一向定無^云。

(装幀の糊付けにより、一行分判読不能)

五陰義

【第一問】

問。成実心、内外法共成人乎。私云、成人唯内_云。付之、五陰成人可通内外。何云唯内乎。

章云、成実法中、色有十四。五根五塵及与四大、為十四也。有人說言、成実法中、声不成人、非是色陰。此言不然。陰積義異、成人法異。何得說言不成人故令声非陰。云何陰異、成人法異。陰通内外、成人唯内。陰通色声、成人唯色。是其異也。云何知声亦是色陰。^⑭如彼成実色相品說。言色陰者、所謂四大及大所因色・香・味・触。亦令四大所成五根。^⑮是等相触故、有声生。举此以积色陰体相。寧非色陰_云。

兼觀擬講云、成実心、四塵成四大、四大成五根。是以成人内色故、且云如此地。以実論之、可通内外也_云。

【第二問】

問。毘曇心、三禪已還可有捨受報乎。進云、無之_云。付之、

章云、依如毘曇、三禪已還下善業果、名之為樂、四禪已上上善業果、說以為捨。是則彼宗、三禪已還無捨受報_云。

此論義 如文等、如身等三業義抄。

【第三問】

康治二年最勝講 証釋開梨 三井
問。毘曇心、証第三禪有意地樂、引何文乎。進云、引雜心樂根意行之文也。付之、雜心無此文。又十（装幀の糊付けにより、一行分判読不能）

私云、旁極僻論義也。

章云、在三禪地、唯就意識、說喜說捨。在三禪中、唯就意地、說樂說捨。既在意地。何不名喜、乃說為樂。是樂性故、雖在意地、不得名喜。故雜心中、說之以為樂根意行_云。

雜心論四云、問。滅・道法智、非色・無色界対治耶。^⑰是故、彼智応為色・無色界見道断邪見境界。若非境界者、亦不応說若法色・無色界愛所潤、見我所受、^愛彼諸対治、応色・無色界見道断邪見縁。答。俱不全故、無過。非全法智為彼界対治。唯滅・道法智、非苦・集法智。亦非滅・道法智全為色・無色界対治。唯修道法智対治非見道。彼初非分故。是故、汝所說不然。譬如樂根意行。^{憂・喜・捨在意地、因六識故、立十八意行。欲界樂根不在意地故、不立意行云。}

疏四云、問滅道下、通其法智治上地難。先問設難滅・道法智非色・無色対治法耶。付是、外人審定論文、下正設難、有其兩句。初結法智、既是上治、応為上地。見道所断邪見境界下、撰非境責其所說六地。法智非色・無色耶見境界、亦不応說彼諸対治。色・無色界道断見縁下、為釈通有二。復次前中、先物俱全故、無不縁過。下別細釈、法智有四。為彼対治唯是滅・道、非是苦・集。是一不全。既就滅・道二種法智唯修道治、非見道治。是二不全。^破後復次中、先法後喻。初非分者、四諦法智（装幀の糊付けにより、一行分判読不能）

不治上界、二初非分。是故、此說是不然也。□□意行、約喻以属。如弁意行有其十八。謂憂・喜・捨、此三在意。有所分別故、說意行。各縁六塵說有十八。如三禪、樂雖在意地、於初欲界非意地故、不立意行。此亦如是二初非分。

所以不說耶見緣也。²⁰云。

【第四問】

問。成実心、苦・樂・捨三受通三界。爾者、引何文乎。進云、苦樂隨身至於四禪、憂喜隨心至於有頂云。付之、此文、苦樂至四禪、不通無色、如何。章云、次明三受通局之義。依如毘曇、苦局欲界、樂通欲・色、捨通三界。成実法中、龜同毘曇。以実細論、並通三界。故彼文言、苦樂隨身至於四禪、憂喜隨心至於有頂云。

三種報業義云、若依成実、苦受之業、起通三界、繫屬欲界。○問曰、上界、云何起苦。釈言、上界報欲盡時、生憂惱心。憂惱即是苦受攝也。故彼論言、苦樂隨身至於四禪、憂喜隨心至於有頂。憂苦受攝云。

【第五問】

天養元年 東大寺二十講 覺光
問。付受陰開合、成実心、立十八意近行。爾者、何分別十八差別乎。進云、五意識・第六意識各有喜・憂・捨三受故云。付之、勘本論文、唯雖有六善・六憂・六捨、未云五意識・第六意識、如何。章云、又成実說、十八意行亦是十八。謂五意識・第六意（識所生之受、各有憂・喜・不憂不喜・故為十八云。）

成実論六云、經中說十八意行。是中、但是一意有十八差別。謂六喜行・六憂行・六捨行。以想分別故、有苦分・樂分・捨等云。

私云、僻論義也。章釈不省毗曇義。可思之。

【第六問】

問。成実心、苦受可通染淨乎。進云、通染淨云。付之、苦受何通淨乎。章云、○或復分為三十六受。如成実說。六根所生各有苦・樂・不苦不樂。並通染淨。是故、合為三十六受云。

成実論六云、問曰、何者是身受。答曰、因五根所生受、是名身受。因第六根所生受、是名心受。問曰、是受云何名垢、云何名淨。答曰、諸煩惱名垢、是煩惱所使受、是名為垢、煩惱所不使受、是名為淨。問曰、云何苦受名淨。答曰、斷煩惱人苦受、是名為淨。又煩惱相違苦受、是名為淨云。

【第七問】

問。毘曇意、以變化心望所化事可云親起乎。進云、遠方便也云。付之、化心是為作變化事。何云遠方便乎。依之、諸□毗曇以變化心作化事云。章云証拠有何処乎。

章云、三性門 言變化者、○略之。問曰、何不直依通體而起變化、別從化心而起化乎。雖有通體能起化事、若無化心、終不起化。故須化心。問曰、若使要從化心而起化者、何須通體。若無通體、雖有化心、欲化前事、終不能現。故（復須之。問曰、化色為當正從化心而現、為當正從通體）而發。釈言、化色正依通體、遠依化心。化心不能親動身口。是故、必依通體化也云。

【第八問】

問。成実心、五陰共通三性乎。進云、唯一行陰、通三性。余皆無記云。付之、論無此說。況十八界義、意識通三性、二十二根義、受通三性云。如何。章云、成実法中、唯一行陰、該通三性。余皆無記云。此論義、要文等、具如三無為義抄。

註

- (1) 同書的重要性や逸文の問題については、拙著『中世東密教学形成論』第五部（法藏館、二〇一八）や拙稿「身延文庫蔵『大乘義章抄』所引の文献・逸文について」（『印仏研』六七―二、二〇一九）等、参照。
- (2) 拙稿「日本における『大乘義章』の受容と展開―附 身延文庫蔵『大乘義章第八抄』所収「二種生死」翻刻」（金剛大学仏教文化研究所編『地論宗の研究』国書刊行会、二〇一七）、同「身延文庫蔵『大乘義章第九抄末』所収「一乘義」翻刻」（『日本古写経研究所研究紀要』第五号、二〇二〇）等、参照。
- (3) この問題については、拙稿『法勝寺御八講問答記』所収の三論宗関連論義（『印仏研』六九―二、二〇二二）で論及した。なお、真空の南都修学が頼瑠教学に及ぼした影響については、拙稿「東密論義と南都教学―三論宗との関係を中心に―」（楠淳澄・野呂靖・亀山隆彦編『日本仏教と論義』法藏館、二〇二〇）を参照されたい。
- (4) 谷口耕生「俱舍曼荼羅と俱舍三十講」（ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第十一号『平安時代の東大寺―密教興隆と末法到来のなかで―』東大寺、二〇一四）、横内裕人「藤原頼長の因明研究と南都仏教」（『日本中世の仏教と東アジア』第五章、塙書房、二〇〇八）等、参照。
- (5) 『大乘義章』の原文では、「諸大菩」となっている。
- (6) 『阿毘曇毘婆沙論』の原文では、「中有」となっている。
- (7) 『大乘義章』の原文では、「已」となっている。
- (8) 『大乘義章』の原文では、「彼唯有意根、最後滅壞」となっている。
- (9) 『大乘義章』の原文では、「説識」となっている。
- (10) 『成実論』の原文には、「所」がない。衍字。
- (11) 『大乘義章』の原文では、「則得寒氷」となっている。
- (12) 『大乘義章』の原文では、「犬」となっている。
- (13) 『大乘義章』の原文には、「者」がない。衍字。

- (14) 『大乘義章』の原文には、「亦」がない。衍字。
- (15) 『大乘義章』の原文では、「因」となっている。
- (16) 『大乘義章』の原文には、「地」がない。衍字。
- (17) 『阿毘曇心論』の原文では、「界法」となっている。
- (18) 『雜阿毘曇心論』の原文では、「雖」となっている。
- (19) 「邪」の誤写と考えられる。
- (20) 「邪」の誤写と考えられる。

※本翻刻の掲載に当たっては、身延山久遠寺、身延文庫、同文庫主事の渡辺永祥先生に格別なるご配慮を賜った。ここに衷心より感謝申し上げます。

※本研究は、JSPS 科研費 JP19K00068 の助成を受けたものである。